様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月 ２８ 日現在

機関番号：１３９０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３６００４５

研究課題名（和文）明治期の言文一致運動と女性の権利

研究課題名（英文）The Movement to Adopt the Colloquial Writing Style (Genbun itchi) and Women's Rights in Meiji-period Japan

研究代表者
Ｅｓｓｅｒｔｉｅｒ　Ｊｏｓｅｐｈ（Essertier, Joseph）

名古屋工業大学・工学（系）研究科（研究院）・准教授

研究者番号：７０５８９２８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：言文一致運動は女性の権利や弱者にどのような影響を与えたか、また「ユニバーサルデザイン」というスタンスから文体の合理化について考察し論文を発表した：
１）「A Pioneering Feminist with a Pioneering Writing Style: Shimizu Shikin's "Broken Ring" (Koware yubiwa, 1891)」　２）「危険なローマ字運動：暗い1930年代に日本語のローマ字使用を主張した齋藤秀一の夢」　３）“Kotoku Shusui and Japanese Linguistic Imperialism”

研究成果の概要（英文）：I began this research assuming that gaining full literacy was difficult for many women in Meiji and wondered, "How did colloquialization affect women's rights?" I focused on the most accessible writing style that had appeared by 1891 in fiction, in "A Pioneering Feminist with a Pioneering Writing Style: Shimizu Shikin's 'Broken Ring' (Koware yubiwa, 1891)" (2015). Expanding on this disadvantaged group to think about reform for such groups in general, I applied Abe Yasushi's "universal-design" approach as I considered 1930s Romanization and Esperanto movements in "Dangerous Romanization Movement: The Dream of Saito Hidekatsu Who Promoted the Romanization of Japanese in the 1930s" (2016). And in “Kotoku Shusui and Japanese Linguistic Imperialism” (2017) I found that this early socialist pioneered and advocated the same conservative style as ultranationalists. Shikin, Hidekatsu, and even Taguchi Ukichi pioneered more inclusive writing, closer to the "universal design" ideal of today.

研究分野：近代日本文学

キーワード：言文一致　女性の権利　民主主義　清水紫琴　齋藤秀一

１．研究開始当初の背景
明治期に起こった言文一致運動は日本の近代化に大きく貢献したと多くの研究者のあいだで認められてきた。そして昨今では、社会的・政治的な面に焦点を当てて分析する研究がなされている。とくに、当時の国家主義との関係からとらえる研究が盛んである。
　しかしながら、言文一致運動をジェンダーの面からとらえる研究はほとんどされていない。私の 知る限り、明治期の言文一致運動を当時の女性作家の活動や女権論と関連させ論じたのは、私だ けだと思われる。これまでに以下のような成果をあげている。

1 “Women as Thinkers and Writers in Meiji Japan,”[ものを書き考える明治期の女性作家たち] Kobe College Corporation Symposium (Union League Club in Chicago, 2002).

2 Michael Bourdaghs 編“Elegance, Propriety, and Power in the ‘Modernization’ of Literary Language in Meiji Japan,” The Linguistic Turn in Contemporary Japanese Literary Studies: Politics, Language, Textuality (University of Michigan Center fbr Japanese Studies, 2010) pp.245~64.

　明治中期の女性作家のなかで、キャノン(文学的正典)の一部と認められたのは、文語体で書　い　た樋ロー葉だけである。しかしながら、当時評価されたのは、一葉だけではなく清水紫琴(1868 ~1933 年)や三宅花圃(1868~1943 年)、若松賤子(1864~1896 年)もいた。この三人は一葉と違って言文一致体か口語の多い文体もしくは会話文で小説を書いた。文語体で書いた一葉だけが キャノンの一部と認められ、会話文を使った清水、口語の多い文体を使用した三宅、言文一致体で著した若松がキャノンの一部として認められず、現代では忘れられた作家になってしまったのはなぜだろうか。ひとつの理由は彼女たちが文語体を選択しなかったからであろう。　それでは、三人のような女性作家や作家になりたかった女性にとって言文一致体とはどんなもの であったのだろうか。私は以下の二点に絞り、言文一致運動が当時の女性および女性の権利拡大につとめ　た人々に与えた影響を研究、考察する。第一に、女性が文語体ではなく言文一致体で小　説を書くとは、文学の場でどのような意義があったのだろうか。第二に、文語体が衰え、言文一致体が支配的になり、女性の権利は向上したのだろうか。この変化によって「考えて書く女性」 の社会的立場はどのように変化したのだろうか。具体的には、言文一致つまり文語体から口語文への変化が女性に与えた影響を、文学雑誌や一般の新聞のテクストを分析し、当時の言説や論争のなかで検討し、考察する。

２．研究の目的
本研究の目的は、明治中期に起こった言文一致運動が、当時の女性および女 性 の 権 利 拡 大 に つとめた人々に与えた影響を研究、考察することである。なお、本研究計画調書では、言文一致とは漢文や和文にかわって、日常に用いられる話し言葉に近い口語体を用いることを指し、言文一致運動とは言文一致を提唱する運動全般を指す。また、言文一致体とは、二葉亭四迷などが実践したいわゆる言文一致体だけではなく、清水紫琴が使った会話文も、口語的な要素の多 い三宅花圃の文体も含めたものを指す。

科研費交付の期間内には次の三点を明らかにしたい。
1. 1890 年ごろ日本人女性の何パーセントの女性が小説が書けるほど読み書き能力を持っていたの か。

2.男性の世界観と女性の世界観に異なった特徴があるとすれば、樋ロー葉が使 っ て い た文語体よ りも言文一致体のほうが女性の世界観を表現しやすかったのだろうか。

3.言文一致体で小説を書いた女性は、当時の文人や知識人、教養人にどう評 価 さ れ た の か。たと えば、樋ロー葉は文語体で書いたが、彼女の文語体は、読者や評論家、編集者などの影響を多大 に受けている。当時の女性作家たちはどのような文 体 を 社 会 か ら 求められていたのか。

３．研究の方法
1)1890　年頃、日本人女性の何パーセントの女性が、小説が書けるほど読み書き能力を持っていたのか、詳細な資料に基づいて検　証する。１女性のリテラシーについて、現存する具体的で歴史的な資料を収集する。資料としては、例え ば、Joan E. Ericson の“The Origins of the Concept of ‘Women’s Literature,” The Woman’s Hand: Gender and Theory in Japanese Women’s Writing (Stanford UP,1996 年)がある。
2 男女間わず、明治期の日本人の識字率に関する国内外の様々な先行研究を読む。海外の史料として挙げられるのは、J. Marshall Unger の Literacy and Script Reform in Occupation Japan: Reading between the Lines(Oxford UP、1996 年)などがある。戦後までは日本の識字率は低か った。識字率が高くなったのは、文体の改革ではなく、学校の改革一例えば、中学校や高校まで 勉強する子供が増えたこと一の功績であると彼は議論する。また、明治期の識字率を把握するに は、Tokugawa Munemasa の「日本人のリテラシー:明治 14 年の「識字調」から」『国語学』(1989 年)と梅樟忠夫の『ことばの比較

文明学』(福武書店、1990 年)と Richard Torrance の‘Literacy and Modern Literature in the Izumo Region, 1880-1930” Journal of Japanese Studies (1996 年)が役に立ちそうである。
2)男性の世界観と女性の世界観に異なった特徴があるとすれば、樋ロー葉が使っていた文語体よりも言文一致体のほうが女性の世界観を表現しやすかったのだろうか。(ここで言う「言文一致体」とは、清水紫琴の会話文も、口語的な要素の多い三宅花圃の文体も含めている。)1言文一致体が登場するまでは、男子が使う言葉は漢文(漢字仮名交じり文も含めて)であり、 女性が使える唯一の純粋の古典的な文体は和文であった。しかしながら、多くの女性にとって言 文一致体は、古典的文体に比べて学 習するのが容易だったものと思われる。例えば、山の手弁を明治時代に流暢に話せた女子にとっては、言文一致体は、古典文体に比べてより短期間で学ぶことができた。その結果、学校では男子も女子も言文一致体で読み書きを習うこととなり、言文一 致体は男女の差別のない書き言葉の文体になった。言文一致体が全国的に普通の書き言葉になる につれて性別に基づく読み書きの「ジェンダー・ギャップ」が埋められていった。一葉や清水紫琴、三宅花圃たちの自叙伝や伝記、新聞への投稿、随筆、全集など様々な資料をひも解きながら言文一致運動が「ジェンダー・ギャップ」を埋めていった過程を検証していく。

４．研究成果

以下の⑷と⑸、⑹、⑺ では、清水紫琴の口語体について研究した。言文一致によって、女性も読み書きが出来るようになり、知識の普及、獲得のみならず、女性の自己表現や解放へと繋がったと言える。
⑷は、言文一致運動をジェンダーの面から鑑みると、清水紫琴の画期的な口頭文体(「会話文」)は女権論思想を現し、新鮮で自己表現を可能にする強い道具になったと論じた。
⑸は、清水紫琴は短編小説「こわれ指環」を通して、家父長制的な家で育った若い女性に対し、女性であるが故に騙され、自由の無い結婚を強いられることについて、世の女性に注意喚起するために分かりやすい「会話文」を作ったと議論した。
⑹は、明治中期に女権論を主張した女性小説家清水紫琴の「こわれ指輪」は国際的な意義があると議論し、英語圏の人に紹介した。
⑺は、もうすでに「こわれ指輪」の英語の翻訳(Shimizu Shikin. “The Broken Ring.” Trans. Rebecca Jennison. The Modern Murasaki: Writing by Women of Meiji Japan. Eds. Rebecca L. Copeland and Melek Ortabasi. (Columbia University Press, 2006))は出版されているが、私は清水紫琴の口頭的な特徴を忠実に表現するよう努め、少し違う解釈で翻訳した。
⑵は、明治期に『浮雲』を書いた二葉亭四迷は最も有名な作家であるが、初期の社会主義者として幸徳秋水も先駆的存在である。彼は現在の国語に近い文体の言文一致体をいち早く取り入れ、新聞の記事などで発表した。しかし、習いやすさの面では１８８５年の田口卯吉の文体の方が優位であり、読みやすさの面では１８９０年ごろの清水紫琴の文体の方が優位である。ユニバーサルデザイン(だれでも早く習って使うことができる)という面ではずっと後の１９３０年代の齋藤秀一(1908 年 - 1940 年)が優位である。“Kōtoku Shūsui and Japanese Linguistic Imperialism”では、私は幸徳秋水の言語帝国主義協力を問題にした。
⑶は、私の日本語学習体験について要約した。日本の言文一致運動やローマ字運動、エスペラント(人工的な国際語)を意識しながら、非漢字使用の言語(英語)を母国語とする外国人が日本語をどのようなプロセスで習ったかについて述べた。
⑴は、ローマ字運動を一つの例として、日本人はどの程度書きことばを合理化したかについて調べた。言文一致運動は、文書の音声主義で口頭文体を可能にする目的があったならば、ローマ字運動が同じゴールであったのではないだろうか。1930 年代のローマ字運動について考察し、徹底的な音声主義は民主主義だけではなく、ユニバーサルデザインへとつなぐと、新しい議論を著した。

５．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

⑴ ジョセフ・エサティエ、「あるアメリカ人の日本語学習体験」『ことばと文字』7(公益財団法人日本のローマ字社、2017 年 4 月 1 日) p17-p24、査読有り

⑵ ジョセフ・エサティエ、「Kōtoku Shūsui and Japanese Linguistic Imperialism」(英語)、『New Directions』 35 号(2017 年 3 月 31 日)、p15-p43、査読無し

⑶ ジョセフ・エサティエ、「危険なローマ字運動:暗い 1930 年代に日本語のローマ字使用を主張した齋藤秀一の夢」『New Directions』 34 号(2016 年 3 月 31 日)、p1-p18、査読無し

⑷ ジョセフ・エサティエ、「A Pioneering Feminist with a Pioneering Writing Style: Shimizu Shikin's "Broken Ring" (Kowareyubiwa, 1891)」『New Directions』33 号(2015 年 3 月 31 日) p1-p16、査読無し

〔学会発表〕（計　　２件）
⑸　ジョセフ・エサティエ、「必要は発明の母：清水紫琴の短編小説「こわれ指環」の革命的談話体と明治期女性読者層の識字能力」、第 14 回 情報保障研究会、名古屋市ウィルあいち、2015 年 3 月 28 日

⑹　ジョセフ・エサティエ、The Impact of Colloquial Writing by Japanese Women Writers in the 1890s、Jadavpur University, Kolkata, India、2015 年 1 月 5 日

〔その他〕（計　１件）
⑺　[翻訳] ジョセフ・エサティエ、「Shimizu Shikin's "Broken Ring (Koware yubiwa, 1891)」、『New Directions』、 2015 年 3 月 31 日。清水紫琴の女権論を表すパイオニア的な短編小説「こわれ指輪」を翻訳した。

６．研究組織
(1)研究代表者
Essertier Joseph（Essertier, Joseph）
名古屋工業大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：70589283

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）